（資料２）

第４８回 サントリー学芸賞 選評

〔政治・経済部門〕

河野（こうの）　有理（ゆうり）（法政大学法学部教授）

『明六社　――　森有礼、西周、福澤諭吉らが集った知的結社』（中央公論新社）および『日本史はいかに物語られてきたか』（新潮社）

あるとき思索の充実が一挙に文章へとほとばしる、そうした書き手がふと現れる。数ヶ月の内に過去の研究を深める本と、自らの書きぶりを乗り越えようとする本とを上梓するのは、まさにそれであろう。河野有理氏の明治初頭の知的状況を再論する一書と、戦後日本の精神状況を史観からとらえなおす一書とを、政治・経済部門ではともに授賞の対象とすることとした。

群像の思想史として、時代は違えど、二書の向かうところは共通する。論を楽しむこともあれば激しい論駁もある。鮮やかな知的演者もいれば、不器用に論を重ねる者もいる。著者は、概念よりは人に着目する研究戦略を、２０１７年の著書『偽史の政治学』で宣言しているが、そこでいう「人」とは、「一人の頂点」ではなく、それぞれの論じ方と個性が溶け合う全体である。

明治六年に結成された知的結社・明六社では、知識人が集い、多岐にわたるテーマを論じあう。他方戦後日本では、ゆるやかな意味での「論壇」を目がけて時代を体現する論をぶつけあう知識人たちが、その存立基盤を探るために独自の日本史を語る。多様な史観一つ一つに、それぞれの論じ方がある。相互交渉のないかに見える群像が、河野氏の手さばきによって史観をめぐって論じあう舞台の演者となる。知識人が自ら望んで明六社に集まり、交わした論議の成り立ちを、戦後の歴史空間の中で蘇らせようとする氏は、まさに「一身にして二生を経る」知的冒険を続けている。

そのためか、氏の筆は、平泉澄や網野善彦といった日本史学者よりも、百田尚樹や西尾幹二など、歴史家ではなく、アカデミズムがその政論を無視してきた論者を描くときに生彩を放つ。しかも氏は、これらから珍妙な史観を取り出す手さばきで、時代時代の論壇のスターだった山口昌男、吉本隆明、羽仁五郎らの珍妙ぶりを描き、

そこから史観に横たわる本来の問題意識に迫る。時代精神を体現するはずの知識人を一旦転倒させて、もう一度置き直す。その過程を読み進めるのは、発見に次ぐ発見の知的体験である。

だが、それを読者に理解させるには、念入りな説明が欠かせない。そのため、氏の文章は、思想体系を鋭利に切り裂き結晶化させるよりは、珍妙さの周囲を徘徊しながら、その珍妙ぶりを解説する前置きを長く取ることになる。同門の高嶺としてそびえ立つ丸山眞男とは対極ともいうべき文体を選び取ったからこそ、これまでの日本政治思想史学ひいては批評家ですら拾いきれなかった知的文脈を鮮やかに剔抉しえたのである。

河野氏といえば、ネット空間という発言の場を駆使しながら、日本政治思想史の思索を続けた人物でもある。深遠な思想家よりは、今では半ば埋もれた思想家に光を当てるのも、氏のネットでの習作の帰結かもしれない。元来ネットの連載であった『日本史はいかに物語られてきたか』には、どこか良質な「2ちゃんねる味」がある。群像の声がこだまするのは、まさにネット論議の本質ではなかったか。氏が明六社に見いだした「交際」が連なる「社会」の発見は、戦後思想においては史観のざわめきがこだまし、残響が溶け合う交響楽となる。今私たちは、時代を体現する「群像の思想史家」の登場を目撃しているのである。

牧原　出（東京大学教授）評

〔政治・経済部門〕

高久（たかく）　玲音（れお）（一橋大学大学院経済学研究科教授）

『医療崩壊の経済学　――　現代日本医療制度の再検討』（慶應義塾大学出版会）

新型コロナウイルス感染症の拡大期に、私たちは「日本の医療は世界でもトップクラスである」という通念が崩れるのを目の当たりにした。日本は人口当たりの病床数が世界で最も多い国の一つであるにもかかわらず、発熱外来も新型コロナ患者を受け入れる病床も足りず、子どもを含む国民全体が長期にわたる行動制限を強いられた。日本より多くの感染者が発生した国々が、より柔軟に患者を受け入れていたのはなぜか。本書は、医療崩壊の原因がコロナ禍によって生じたのではなく、コロナ前から日本の医療制度に内在していたことを、データに基づく実証分析によって明らかにしたものである。

著者はまず、日本の医療制度の特徴を、民間医療機関中心の医療提供体制、医師の自由開業制、保険者間で保険料が大きく異なる皆保険制度という三点に整理する。そのうえで、これまでの医療制度改革がなぜ効果をあげなかったのかを解明していく。診療報酬の引き下げは医療費抑制の主要な手段であるが、近年では改定率と国民医療費の増加率との相関は小さい。出来高払い制度のもとでは、医療機関が利潤率を維持するために検査や診療を増やすという「経営努力」が可能だからである。包括払い制度も、医療機関に選択の余地を残す形で導入されたため、医療費削減効果は見られなかった。制度改革に対して医療界が巧みに「対応」してきたことが、改革の効果を小さくしてきたのである。

本書の白眉は、コロナ禍の病床問題の分析である。地域医療構想では急性期病床の過剰が問題とされてきたのに、コロナ対応では急性期病床の不足が問題となった。著者は、手術実績のほとんどない「名ばかり」急性期病床が全体の四分の一を占め、それが小規模病院に集中し、そうした病院ほどコロナ患者の受け入れも少なかったことを示す。さらに、情報公開請求によって得たデータから、補助金を受けながら患者を受け入れなかった「幽霊病床」の比率を推定し、公立・公的病院においても不必要な病床確保に巨額の補助金が支払われていたことを明らかにしている。救急搬送についても、平時から「断らない救急」を実践し、救急医療を集約化していた地域ではコロナ禍でも搬送実績が悪化しなかったことを示す。医師の診療科偏在の背景に、医学部入試の難化による専門医志向の高まりがあるという分析も興味深い。

著者の高久玲音氏は、気鋭の医療経済学者である。本書の特徴は、制度の歴史と現状を丁寧に記述したうえで、公開データのみならず情報公開請求まで駆使して自ら事実を掘り起こし、実証分析の結果を一貫した論理で政策提言につなげている

点にある。医療制度改革は、これまで変わらなかったからと諦められがちな分野である。しかし、人口減少社会において、限られた医師と医療資源でよりよい医療を提供する体制の構築は急務である。エビデンスに基づく本書の冷静な分析と説得的な提言は、日本の医療制度論議の水準を一段と高めるものであり、サントリー学芸賞にふさわしい業績である。

大竹　文雄氏（大阪大学特任教授）評

〔芸術・文学部門〕

張（ちょう）　雅（が）（大阪大学国際機構特任助教）

『南洋に向かう女性作家　――　帝国日本の南洋統治と女性表象』（勁草書房）

「南洋」、それは帝国日本が夢見たフロンティアだった。１９３８年に国家総動員法が公布され、１９４１年から１９４４年にかけて東南アジアに多くの「徴用作家」が派遣されたことはよく知られる。男性作家よりも圧倒的に数は少ないものの、そこには女性の文学者も含まれていた。この本は、彼女たちによるテクスト群を一つのまとまりとして主題化して考察した、初の研究書である。

派遣先での女性作家の役割は、日本の軍政がうまくいっていることを「女性ならでは」の視点から内地に向けて発信し、現地の要人や在留邦人と交流することだった。だが「準兵士」という立場の男性作家とは違い、報道班の一員や文化使節などの肩書きで渡航した彼女らは、基本的に民間人という扱いだった。軍幹部の話し相手や、「日本婦人」としての範を現地女性に示すことも期待された女性の文筆家は、観察や執筆の主体であると同時に、欲望と監視の対象でもあったはずだ。当然ながら彼女たちは男性作家たちとは異なる体験をしたのである。

そうした女性作家たちによる小説や滞在記は、どの程度、帝国日本を代弁し、そのオリエンタリズム的な視線を内面化していたのか。また、そのテクストが日本による占領を批判的に捉え、植民地主義的な心性からの逸脱を見せることはあったのか。この本の素晴らしさは、まずもってこの着眼点の鋭さと、的確な作品選択、そしてテクスト分析の理論的強度にある。

張氏は、現在は必ずしも広く読まれない、戦中のテクストを前景化させる。たとえば、マレー人男性と日本人女性の結婚という、当時は「国恥」とされた題材を扱った森三千代の『国違ひ』と『帰去来』を論じた章は、内地でも外地でも家父長制の抑圧から逃れられない主人公の苦悩と、その支配への抵抗を試みる彼女の心中描写を分析して読み応えがある。また「日仏協力」の状態にあったベトナムを扱った章では、作家によって仏印の見方が違うことや、短期間の派遣ではなかなか現地の実情を捉えられない、ある種「お飾り」としての彼女たちの限界を示す。さらに、同時期にフィリピンに派遣された三宅艶子と川上喜久子による滞在記を見る章では、大本営に迎合したかのような三宅と、軍隊内の階級格差にまで目を向けた川上の比較から、一枚岩ではない女性作家たちのあり方を浮き彫りにしている。

とはいえ、彼女たちが戦時中に表だって軍部を批判する文章を発表できるはずもない。また敗戦後もかつての「戦争協力者」としての自己を批判する視点をどこまで持ち得たのか、張氏は冷静に疑問視する。宗主国の作家が占領地について書いた

ものを考察する以上、これはある程度予測できた結論かもしれない。しかしながら、張氏はこれらのテクストを「日本版オリエンタリズム」として切って捨てるのではなく、作者である女性たちが抱えていた、恐らくは活字にし得なかったであろう葛藤も含めて再読の価値があるものとして読み直している。その建設的な姿勢こそが本書の真骨頂であろう。

もし張氏が、林芙美子をモデルとした桐野夏生の『ナニカアル』や、同じく林を部分的にモデルとする楊双子の『台湾漫遊鉄道のふたり』について考察したら、どのような評論が生まれるだろうか。また、かつて滞在したパリを懐かしむかのように、ベトナムの紀行詩集をフランス語で書いた森三千代についてのより詳細な作家論なども読んでみたい。次の研究成果が楽しみな書き手の誕生だ。

池上　裕子（大阪大学教授）評

〔芸術・文学部門〕

難波（なんば）　優輝（ゆうき）（立命館大学ゲーム研究センター客員研究員）

『物語化批判の哲学　――　〈わたしの人生〉を遊びなおすために』（講談社）

ポストモダンで「大きな物語」は死んだはずなのに、気がつくといつのまにかＳＮＳを中心に無数の小さな「マイ・ストーリー」が猖獗（しょうけつ）を極めている。お互いが「私ってこういう人」と自分の人生を物語化し、互いに「わかるわかる」と共感しあう。うるわしい話ではある。しかし本書は問う――「人生を簡単に『お話し』にしていいのか？」と。本書は耳ざわりのいい「お互いがわかりあえるお話し」への真正面からの異議申し立てであり、ひいては二十一世紀の新しい人生論である。

そもそも人生とは一定の時間内を生きるということだ。「一定の時間」とは個人の人生だけではない。集合体のそれ（国民の歴史など）でも、フィクション（もちろん小説が代表）でも、時間芸術（音楽や舞踏）でもいい。幸か不幸か人間はこれらを動物のように「ただ生きる」ことが出来ない。意味づけせずにはおれない。分節しセグメントを何らかの形で関連づけるのだ。その最も手っ取り早いツールが物語＝ナラティヴである。なにせ起承転結がある。だから「人生時間に無意味なセグメントはなかった」と思える。そしてなんらかのハッピーエンド的しめくくりへの希望も持てる。人は「起源があって、有意味に終わりに向かっている時間の中を、自分は生きている」と思いたいものなのだ。

それに対して本書が「物語」に代わる「時間を意味づけるモデル」として提示するのが、四つのオールターナティヴだ。ゲーム、パズル、ギャンブル、そしておもちゃ。ポリティカル・コレクトネスに配慮する人生論なら回避するだろうヤクザな領域ばかり。だが本書はアンチ物語としてのこれらの有効性を強調するだけでなく、負の部分への目配りも忘れない。人生時間がゲームなら「勝ち」が究極のゴールになるが、それでいいのか？　パズルには唯一の「解」があるが、「解ある人生」など現実にはありえない。ギャンブルは一か八かであり、不可知論的に人生をとらえるには向いたメタファーだが、しかし人生を本当にギャンブル化してしまうとヤバイ・・・。

本書が希望を託するのは「おもちゃ」である。遊びに興じる子どもである。私自身、子どものころ親に買ってもらった大切な機関車のおもちゃなどを、なぜかつい分解したくなって、次々壊していたことを思い出す。また組み立て直したかったのだ。おもちゃ遊びは形の定まっているものをメチャクチャにする。しかしそれはギャンブル的破壊ではない。そこには新たな組み立て直しへの夢が宿っている。

物語的なものへの安易な寄りかかりに対する本書の批判は強烈だ。しかし批判する者は代案を出す義務を負う。本書は「代わりとなる希望を示す」という責任を

果たしている。締めくくりでは次のように書かれる――「大人たちはもっと、子どもたちのように成熟しなければならない」と。

岡田　暁生（同志社大学客員教授）評

〔社会・風俗部門〕

大竹（おおたけ）　裕子（ゆうこ）（ロンドン大学社会学研究院リサーチ・フェロー）

『生きることでなぜ、たましいの傷が癒されるのか
　　――　紛争地ルワンダに暮らす人びとの民族誌』（白水社）

アフリカのルワンダでは、１９９０年代に内戦がくりひろげられた。民族的なジェノサイド、そしてそれへの報復めいた紛争もおこなっている。多くの人がなくなった。生きのこった者も、少なからず心身に痛手をこうむっている。

そんなルワンダのムサンゼ地域に、著者ははいっていく。もともとは、日本で心理カウンセリングの仕事をしていた。そして、ルワンダの惨劇を知り、関心をいだくようになる。極限状況をへて心を病んだ人々の、その心理的な回復に貢献したい。以上のような想いをいだいて現地へおもむいた。

この本は、そんな著者による医療人類学的な記録である。いわゆる先進国におけるカウンセリングは、ルワンダでどこまで通用するのか。あまり効果がない場合は、何でおぎなえるのかといったことを教えてくれる。

いっぱんに、カウンセリングはクライアントの心をひらかせようとする。当人の語りをつうじて心の中へわけいり、問題点を見つけだすことがめざされる。しかし、ルワンダにはその語りが困難な、あるいは不可能と言うしかない状況もあった。

１９９４年のジェノサイドは、現地でも話題になる。しかしそれへの復讐は語ることがゆるされていない。現政権が公言することを禁じている。彼地は言論統制、いや発話統制下におかれていた。なのに、今のべた復讐が精神的な傷の根本原因となっている人も、おおぜいいる。

語りを問題解決のよりどころとするカウンセラーが、その語りをひきだせない。現地の人は当局におびえ、口外しなかった。言語中心主義に立脚する制度的な学知が、作動することを封じられている。こういう状況下で、カウンセラーには何ができるのか。その点では、とまどわざるをえなくなる。

それでも、著者は彼らとむきあった。そして、回復へといたった人を、少なからずまのあたりにする。むりやり、語りをこじあけたわけではない。語らずとも、しだいに癒やされていったケースを見とどけた。教科書的なカウンセリングをへなくても、治癒はありうる。骨身にしみて、そう確信したことを、著者は書きとめている。

土着の信仰や習俗にささえられた回復があった。地域社会の中で獲得されたそれもある。キリスト教の教会だって、効果を発揮しなかったわけではない。読みおえ、近代的な制度に生きる私は、さまざまなことを考えさせられた。カウンセリングという枠をこえて、読者にうったえかける本である。

ざんねんに思ったところを一点、のべそえる。この本には、心理学や人類学へ

むけての弁解めいた記述がある。もとは、学位論文として書かれた英文の著作である。既存の学術にたいして、自分の立場をはっきりさせる作業は、必要であったろう。しかし、日本の読書人にむけては、はぶいてもよかったような気がする。

制度的な学知には限界がある。そんな指摘にうならされた私の、よけいなおせっかいかもしれないが。

井上　章一（国際日本文化研究センター所長）評

〔思想・歴史部門〕

松本（まつもと）　彩花（あやか）（北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院専任講師）

『独裁と喝采　――　カール・シュミット〈民主主義〉論の成立』

（慶應義塾大学出版会）

カール・シュミット論の新時代を画する著作に対して、サントリー学芸賞「思想・歴史部門」を贈れることを審査員の一人として喜びたい。

受賞作の大きなメリットは、近年利用可能になったシュミットの日記帳や書簡等の遺稿をフルに活用している点である。彼の生い立ちや思想形成、第一次世界大戦における戦場での苦難、革命と内戦的状況の極限的な緊張、さらに共和国崩壊期における思想や行動を明らかにすることで、本書はシュミットという危うさと魅力にみちた思想家がいかに生まれたのかを実証的に明らかにしていく。理論的には跳躍にも見えるシュミットの思考の変化を、文献のていねいな読解を通じて解明していく叙述は、謎解きに似たスリリングさに満ちている。

本書の鍵となるのは、「いかにしてシュミットは民主主義を受け入れたのか」という問いである。シュミットといえば「独裁」、あるいは「政治的なもの」を「味方と敵」の関係として定義した理論家であるという既存のイメージからすれば、シュミットと民主主義という問題の立て方はミスマッチに見えるかもしれない。しかしながら、本書が明らかにするように、本来、民主主義的な思想家ではなかったシュミットは、１９２３年を転換点に民主主義の評価を大きく転換させている。以後のシュミットの独特な議論はすべて、まさに彼が民主主義を全面的に受け入れた結果であるというのが、本書の「読み」である。当然でありながら、これまで正面から問われてこなかった鋭い問題提起である。

問われるのは、シュミットの民主主義の内実である。彼は独自のルソー解釈を通じて、民主主義を「治者と被治者の同一性」として定義する。「人民の意志」を究極の正統性の根拠とする政治体制であり、実質的には政治指導者に対して、人民が喝采し協賛を与えることを意味する。本書を読めば、シュミットがルソーを丁寧に読み、問題提起を受け入れ、時代の苦闘の中で問いを深めていったことがわかるだろう。そのルソー解釈は決して恣意的なものではなかった。とはいえ、結果として彼のオリジナルな思考は実に極端な結論に行き着くことになる。

カトリックの家庭に生まれ、その原罪観ゆえに個人主義に悲観的な考えを抱いた若き日のシュミットは、近世において国家の統一を実現した絶対君主政への評価から、国家の役割を重視する思想家となる。やがて第一次世界大戦の敗戦と革命の緊迫した時期にあって、シュミットは戒厳状態や独裁についての考察を深めていった。かつて民主主義では国家の統一を実現できないと考えた思想家は、むしろ

「人民の意志」という擬制を通じて「治者と被治者の同一性」を実現する民主主義を徹底的に受容したのである。

シュミットは民主主義を否定したから危険な思想家だったのではない。むしろ国家と主権を重視したからこそ、民主主義のフィクション性を自覚した上でこれを積極的に受け入れ、その論理の限界まで推し進めた結果、現在から見ても危ういが魅力的な思想家となったのである。「人民の同質性」を強調して異質な存在を排除することを肯定し、自らの意志を人民の意志と同一視する少数者による独裁が民主主義と矛盾しないと主張した理論家シュミットは、まさに現代の理論家である。今こそシュミットを読み直さないといけない。そう痛感させる著作である。

宇野　重規（東京大学教授）評

〔思想・歴史部門〕

森（もり）　亜紀子（あきこ）（同志社大学〈奄美－沖縄－琉球〉研究センター嘱託研究員）

『南洋群島に生きた沖縄移民
　　――　〈不可視化した世界／忘却した時〉をたぐりよせる』
（京都大学学術出版会）

第一次世界大戦後、ソテツ地獄という南西諸島全域が飢えに苦しんだ経済危機があった。猛毒のソテツをきちんと毒抜きしないまま食べて亡くなった人がいたからこんな名前がついた。原因の一つは、このサトウキビの単作栽培地域が、世界砂糖価格の暴落に耐えられなかったことにある。ソテツ地獄以後、たくさんの沖縄の人びとが日本の移民統治下の南洋群島に移住した。もちろん、それ以前に一攫千金を狙って移住した人もいる。本書が扱うのは、このような、さまざまな想いをかかえて、見知らぬ南洋にわたった沖縄の人びとの歴史である。

２０年間かけて、１５２名の体験者に聞き取りをし、2冊の資料集を作成して、１冊の本にまとめた。著者の粘り強い仕事はもはや、「研究成果」というみみっちい言葉に集約できない。「研究遺産」と言うべきかもしれない。オーラルヒストリーの厚みと豊かさに圧倒される。「悲劇」に押し込めない。人びとの苦しみにも差別意識にも耳をふさがない。著者が耳を傾けた人びとの声に、著者への信頼が滲んでいる。自分はヤマトンチュの研究者だがここでなぜ調査をしているのか、という反芻を擦り切れるほど繰り返してきたことを、聞かれる側の人びとが十分に知っている。きっと、著者の性格も、好きな食べものも、おじいやおばあに知られているのではないか、と思わされるほど内面に迫る言葉も多い。「学芸賞」である理由の一つは、ここにある。これは「聞く」という学問の芸を味わう本ではないか。

一冊の本に時間をかけすぎだ、という人もいるかもしれない。もっと短くまとめられるだろう、と思った人もいるかもしれない。実は、私もそのひとりだ。だが、きっと、だれもこの本を縮約などできない。著者は、充実した調査をし、器用にまとめて、立派な本にし、学会で評価されるという「それなりにすばらしい研究者人生」の道筋に足元をすくわれるまえに、お年寄りの声に身も心も奪われてしまうことをよしとしたのだろう。そしてその声にこびりついた汗や海や血の匂いに取り憑かれたのだろう。そのほうが研究者としてのみならず、人生として豊かなのかもしれないと、この本はいたるところで静かに伝えているように思う。

また、本書が、自然相手に仕事をする猛者たちを生きいきと描いていることも評価されるべきだろう。サトウキビだけではない。当時、マンゴー、パイナップル、ゴム、カツオといった産品が、どんな労働構造の中で生産されていたのかもきちんと知ることができる。このような著者の第一次産業への視点は、読者に、食卓の

向こうにある世界の厳しさと権力のありようをきちんと示している。比較農史研究室で学んだ方法論が生きているし、批判的視座が抜け落ちていない。ただ、それがほとんど図式的にならないのは、あくまでも、おじいやおばあの小さな声が、著者の耳の中であまりにも大きく響いたからであり、それゆえに、批判の言葉がきちんと太平洋の島々の風景になじんでいる。このように重心の低い姿勢のまま、これからも消えゆく声を抱きとめ、書きつづけてほしい。

研究の初心を、ここまで忘れないでいられる人は珍しい。

藤原　辰史（京都大学教授）評

以　　上